

Glocal Tenri



10

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.10 October 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
違和感
／永尾 教昭 1
- ・ 文脈で読む「身上さとし」(3)
増野正兵衛：おさづけを頂くまで①
／深谷 耕治 2
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”
で— (37)
天理教教義翻訳の諸相④
／成田 道広 3
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (30)
20世紀のライシテ⑤
／藤原 理人 4
- ・ 音のちから—中国古代の人と音楽 (10)
草が踊る
／中 純子 5
- ・ ヴァチカン便り (58)
法王、カナダの先住民を訪問
／山口 英雄 6
- ・ 思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考 (21)
仏教にみる障害者像
／八木 三郎 7
- ・ おやさと研究所ニュース 8
第14回国際エクササイズサイエンス学会
学術大会を視聴／東北大学で研究会
開催／2022年度公開教学講座のご案内

巻頭言

違和感

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

すでに述べているように筆者は25年間、フランスといういわば現場で天理教の海外布教に専心した。その拙い経験から筆者なりに言えることは、海外布教が直面する困難さの最大要因は、現地の人々が外から入ってきた宗教に抱く強烈な違和感ではないだろうか。

現在、フランスをはじめヨーロッパ各国は移民問題に苦慮している。その結果、いわゆるポピュリズムを掲げる極右政党が躍進している。フランスでも、今年4月に行われた大統領選挙で国民連合のマリーヌ・ルペン党首が決選投票にまで進んだ。最終的には、現職のエマニュエル・マクロンが再選を果たしたが、過去にないほど極右勢力が支持を得た。フランスは伝統的に移民に寛容である。それでも、あまりに増える移民に対し国民の間に拒否反応が起こっており、それがこのような結果になった一因だろう。

フランスの場合、かつての植民地であったマグレブ諸国(北アフリカ)などからの移民が多い。また最近ではタリバンが支配するアフガニスタンや長引く内戦から逃れてきたシリア難民も増えている。

移民が増えることで社会福祉費用が膨張する、職を奪われる、あるいは事実かどうかはともかく犯罪が増えると主張する人も少なくない。しかし、そういった政治的、経済的問題よりも、むしろヨーロッパの文明、言い換えればキリスト教文明が壊されるという危機感から移民が増えることに反対する声が強いのではないか。

上に挙げたような地域からの移民は、そのほとんどがイスラム教徒である。彼らがフランスに定住すれば、おそらくフランスの法律を遵守して生きていくのだろうが、イスラムの教え、習慣はたとえ国を越えても当然守っていく。いわばそれが彼らのアイデンティティでもある。したがってクリスマスや復活祭を祝うこともないだろうし、一日に5回マッカに向かっ

て祈り、豚肉は当然食べない。

サミュエル・ハンチントン⁽¹⁾は、問題は「現在のヨーロッパやアメリカの西欧文化に移民たちがどの程度まで同化できるか」と述べる。しかし、現実には宗教の教義であるがゆえに、同化つまり教義や実践行為をキリスト教式に変えることはできない。その結果、「西欧にとって、基本的な問題はイスラムの原理主義⁽²⁾ではない。問題はイスラムそのものなのだ」と扉を閉ざした状態となる。やはりフランスの極右団体(すでに解散)の長であったイヴァン・ベネデッティは、フランス人とは白人でカトリックの精神を持っていなければならないと主張し、「イスラム系移民の子孫で、フランスで生まれ、フランスしか知らない人たちはどうなるのか」という質問に対し「馬小屋で生まれた牛は馬ではありません」とし、「フランスはキリスト教の地である欧州にあります。欧州やフランスでイスラムは正当性を持たないのです⁽³⁾」とあまりに非論理的でほとんど感情的とも言える考えを述べる。

ヨーロッパの人たちが、イスラム教に対して抱く違和感が、移民の増大とともにキリスト教文明が淘汰されてしまうという恐怖感に変わり、それが極右的な思想となり移民の排斥運動にも繋がっていくのだろう。

天理教に限らず、非ヨーロッパ圏で誕生した宗教(実はキリスト教もそうなのだが)はどこであれ、ヨーロッパで信者を著しく増やしていけば同じ問題に直面するだろう。逆も同じで、日本でイスラム教に違和感を抱く人もいるかもしれない。この現地の人々が抱く違和感を払拭することは決して容易なことではない。

〔註〕

(1) サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』鈴木主税訳、集英社、1998年、308頁。

(2) 同書、329頁。

(3) 宮川裕章『フランス現代史 隠された記憶—戦争のタブーを追跡する』ちくま新書、2017年、141頁。